

十二卷に載せたる越大山の歌を、萬葉家に越中と註せし類なるべし。さて本丸の地は、寶曆五年幕府の國目附より尋問の答書に、本丸廻五町拾六間也とあり。但し此の書出方を考ふるに、本丸は東丸も一緒になし、櫓・庫倉・門數等を載せられたれば、本丸廻五町拾六間は、本丸・東丸兩曲輪を合併しての間數ならんか。尙追致すべし。又本丸の高さは、金城深秘錄に、卯辰山の高さ五十一間、本丸より四十一間高し。本丸より卯辰山まで拾五町拾間也とし、此の間數天明七年御城代より城中之繪圖修復方に渡されし時、寫し置きたる間數なりと記載す。右卯辰山の高さにて比較する時は、本丸の高さ地上より拾間なりと聞ゆ。實に此の間數其れ以前測量家の巨細に取調べたるもの歟、いまだ詳かならず。予安政元年能登國遊歴の時、風至郡穴水に至り長家の故城跡を一覽せしに、穴水大町村の土人誘引し、此の城は岩立城とも白藤城とも呼びて、高さ海面より十丈許、金澤城本丸の高さと凡そ同じといへり。又慶應元年越中國射水郡氷見邊遊歴の時、菊池氏の故城阿尾の城跡を一覽するに、阿尾の邑人誘引し、此の城は金澤城本丸より五間高し

と云ひ傳へたりといへり。三州志故墟考に、阿尾城海面より城地高き事十七丈。頭註に云ふ。享保二年の上番に、阿尾城高き事十八丈三尺とありといへり。金澤城本丸の高さを尙追考すべし。

○本丸之傳話

舊傳に云ふ。本丸の地は昔松木生ひ茂り、頗る魔所にて、種々の怪異ありしが、舊藩祖大納言利家卿入城、本丸の地に居館し給ふ頃、魔を制して石川郡黒壁山へ移住すべき旨を示し給ふ故に、夫れより黒壁山をば世人魔所とす。黒壁山は石川郡富樫の郷内三小牛村の持山にて、今も世俗魔所とし、廢藩前は老松繁茂して、餘山の松は伐採すといへども、黒壁の松は伐採を禁じたり。然るに廢藩の後は、三小牛の邑民悉く伐取りたり。従前は遊山人など猥りに登山すれば、必ず種々の異變ありし話ども、于今殘れり。怪異の虚實は不詳といへども、彼の山中に洞穴を造り、石造の小祠を置き神靈の鎮坐所とす。此は金澤居住の巫或は修驗派の悪徒等が元と構へたるものにて、彼等の徒靈異炳焉なるよしを云ひ振らし、頑愚の人を勧め、彼の地へ誘引し、麓

なる谷川にて身を淨め、洞穴に籠居し、酒饌を食供して病病を祈禱し、壽福を祈請すと稱し、誘引の信者に種々附會の虚言を示し、甚だしきに至りては、神託とて嗣陰より異なる音聲を發し、鰐鰯を告げて益信を取らしめ、夥多の金錢を食する事多年なりき。然るに明治六年縣廳より右山中の淫洞を破却すべき旨を達せられ、里人甚だ恐怖せりといへども、戸長縣命を奉じ悉く破却せしが、其の後も尙登山籠居する事今に絶えずといへり。おもふに文德實錄仁壽二年二月壬戌藤原高房の卒傳に、天長四年春授從五位下。拜美濃介。云々。席田郡有妖巫。其靈轉行暗噉心。一種滋蔓。民被毒害。古來長吏皆懷恐怖。不敢入其部。高房單騎入部。追捕其類。一時酷罰。由是無復噉心之毒。とある。是等の古例にても黒壁山の巫術實に惡むべし。又年譜に云ふ。寶永二乙酉年閏四月金澤城中に蛇蛇顯る。或日一疋は本丸下堀上の路邊に出顯す。其の容跡大概長さ四丈許、色白し。一疋は石川一二之門石垣下に出顯す。色青く光あり。其の首猫に似たりと云ふ。按ずるに和名鈔に、蛸蛇文字集略云。蛸音釋、和名仁之木倍美。蛇文如連錢錦也。又云。蛸蛇

兼名苑云、蛸音釋、和名夜高加々智。見內典。蛇之最大也。とあれば、彼の出顯せしも蛸蛇ならんか。ヤマカゲ、チは今云ふ。ヤマカゲと呼べるものなるべし。思ふに往昔尾山の芝山なりし比より住み居たる蛇なる事知られけり。三州志來因概覽附錄に云ふ。寶永二年閏四月、本丸壘上之路、白蛇蜿蜒而臥、長可四丈。又石川門邊編石下、青蛇出首。如大猫。並皮鱗有光。此後亦有見之金城中者。古來相傳。青白二蛇是雌雄。即護城神也。又寶曆九年、薪丸叢間。有有耳有足之蛇。在直士屢見之云。此事雖性說而恥君子之譏。景周此集舊錄中所載者併附。と有り。平次按ずるに、武家耳底記に、能登國鹿島郡筑籬山に大き成る楠有りて、廻りは大竹藪也。是に主ありとて、此の山の側邊りへは人行かず。利家卿入部せられ、此の事を聞召し、我此の度國主として爰に至る。我が領分に他の主あらんや。是を退治すべしとて、巡りの竹藪に火をかけ燒き立てられしに、楠に火移り、三日の間燒けたりけり。山岳大いに震動し、終に楠燒け倒れたり。人々打寄り見つるに、大蛇燒死して居れり。彼の白骨を、七尾の町人の中に取傳へて所持する者あり。渡り